

作物名：水稲

病害虫名：稲こうじ病（病原：*Villosiclava virens*）



発病籾

1 被害の特徴と診断のポイント

本病は籾にのみ発生する。乳熟期ごろから内外穎が少し開き，その隙間から緑黄色の小さな肉塊状の突起が現れ，しだいに大きくなって籾を包む菌糸塊(病粒)となる。病粒ははじめ薄い膜で覆われているが，成熟すると緑黒色となり，皮膜が破れ表面は粉状(厚壁孢子)となる。収穫期近くになると，塊の上に黒色で不定形の菌核を形成する。

被害は登熟歩合の低下や，死米や乳白米の増加である。さらに，病粒の混入により品質が低下する。

2 伝染源及び伝染方法

伝染源は，厚壁孢子と菌核であり，田面に落ちて越冬する。翌年，厚壁孢子や菌核から生じた子のう胞子が風雨で飛散し，穂ばらみ期から出穂期にかけて，葉鞘の合わせ目から雨露とともに内部に流れ込む。これらは幼穂に達し，出穂後に病粒を形成する。厚壁孢子や子のう胞子が発芽して形成された分生孢子によっても，幼穂へ感染する。

3 発病・伝染好適条件

- ・前年，発生が多かったほ場...ほ場に残った菌核や厚膜孢子が伝染源となり，多発する可能性。
- ・穂ばらみ期に低温で降雨が多い...幼穂への感染に好適。
- ・出穂期以降の高温...病粒の肥大促進。
- ・出穂期が遅い品種，植え付け本数が多い水田，窒素過多田等。

4 防除対策

化学的防除

- ・銅含有の薬剤は出穂20～10日前に散布する。
- ・穂いもち，紋枯病との同時防除剤の散布は，出穂前8～12日頃に行う。薬剤の散布時期がこれより早いと穂いもちや紋枯病に対する防除効果が低下し，これより遅くなると稲こうじ病に対する防除効果が低下する。
- ・紋枯病と同時防除が可能な水面施用剤もある。

5 出典

(1)参考文献：宮城の稲作指導指針【基本編】，農業総覧 病害虫 防除・資材編(農文協)，日本植物病害大事典(全国農村教育協会)

(2)写真：宮城県病害虫防除所撮影